

水彩画との出会い

会員

辺見 富美子

「グリーン」とベルが鳴る。その時私はアパートの一室で版木を彫っていた。

「新しい水彩画の公募展ができたけど出品者が少なくて、卒業してからも絵を続けている人に出品のお願いをしている。」

電話をかけてきた旧クラスメートの労に報い、一度限りの友情出品として、全紙2点を出品。これで終わるはずだった。

ところが「入賞」の葉書が来て面食らい、悩んだ。会友推挙？とんでもない。版画と水彩の両立なんて、社会人2年目の自分にできるかと。

しかし、創立したての公募展とはどういうものか、将来の個展に向けて展覧会開催のノウハウを学ぶ良い機会ではないかという好奇心が勝りこれが現在まで水彩とつき合う事になるとも知らず、授賞式に出席。

若かったのだ。

会の一員となるという事は、ノルマと責任を負う事である。

又それは、自分にとって人生の大きな進路変更を伴うものであった。

なぜなら、ここの会員方の絵は、私の歩んで来た世界とは別次元の表現ばかりだったのだ。版画では想像力を働かせて表現できた事が、水彩では対象の形・色から少しでもズレる事は悪しとした自己の常識と30年近く戦う事になり、描く事が苦痛になった。迷い、絵が壊れた。

他者の表現に振り回され「自分の絵」を見つけられない日々。

その様な時に五十嵐恒氏が、私の絵を見続けてくれていた事がわかりフツと肩の力が抜け、自分は自分と開き直ると、描く事が楽になった。

間接技法より直接技法、三次元世界より二次元世界、油性画材より水性画材、自分の性分に合う表現を見つける為に、複数分野を同時に手がけては1つを選ぶの繰り返し。結局最後に掴んだのは水彩画だった。

道彩会は私にとって学び舎であり、様々な出会いの場でもある。

悟りの遅い分、残りの人生は1/4しか残っていないけれど、気の向くままに好きに描いて暮せたら幸に思う。